咸宜園でスピード昇級

上野彦馬とその時代

姫野順一

生誕

8月19日は「世界写真の日」。1839年のその日、フランス学士院で、ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが開発した銀板写真（ダゲレオタイプ）の実用的写真撮影法が発表されたのにちなんでフランス政府が制定した。

彦馬はその約1年前の天保9（1838）年に銀屋町（現長崎市銀屋町）で生まれた。

「彦」は、家の東にそびえる彦山から命名された。父俊之丞48歳、母以曽28歳。先妻の子、俊平と拾馬は養子で他家に出た。後妻の以曽は先に男の得馬と勝馬を生んでいたが、2人とも早世したため、三男の彦馬が長男として上野の家督を相続しなければならなかった。上には丹葉とちえの2人の姉が、下には幸馬と鉄馬の2人の弟、ぬさとこの2人の妹がいた。大家族である。

咸宜園の入門簿
（公益財団法人廣瀬資料館蔵）

入塾

彦馬は5歳の春、町内の寺子屋松下文平塾に入塾し、四書五経の素読と書を始めた。「評伝上野彦馬」（1993年）の著者八幡政男は、彦馬の雄勁で華麗な能書はこの頃培われたとみる。

読み、書き、算法を学ぶ町内の「読会（よみかい）」にも通った。会の仲良しがいじめられたので、年長者に立ち向かい殴られて眉間に傷を負ったという。正義感は強かった。

嘉永4（1851）年8月12日、13歳の彦馬は父俊之丞を亡くす。母以曽は41歳。子どもが多く、長男彦馬に対する期待は大きかった。

忌明けの11月15日、彦馬は14歳で上野家の家督を相続した。

② 14歳で家督相続

俊之丞が開業した製硝工場は天保14（1843）年に官営の御用精錬所となり、事実上閉鎖状態であった。これを彦馬が引き継ぐには洋学の知識が必要であった。

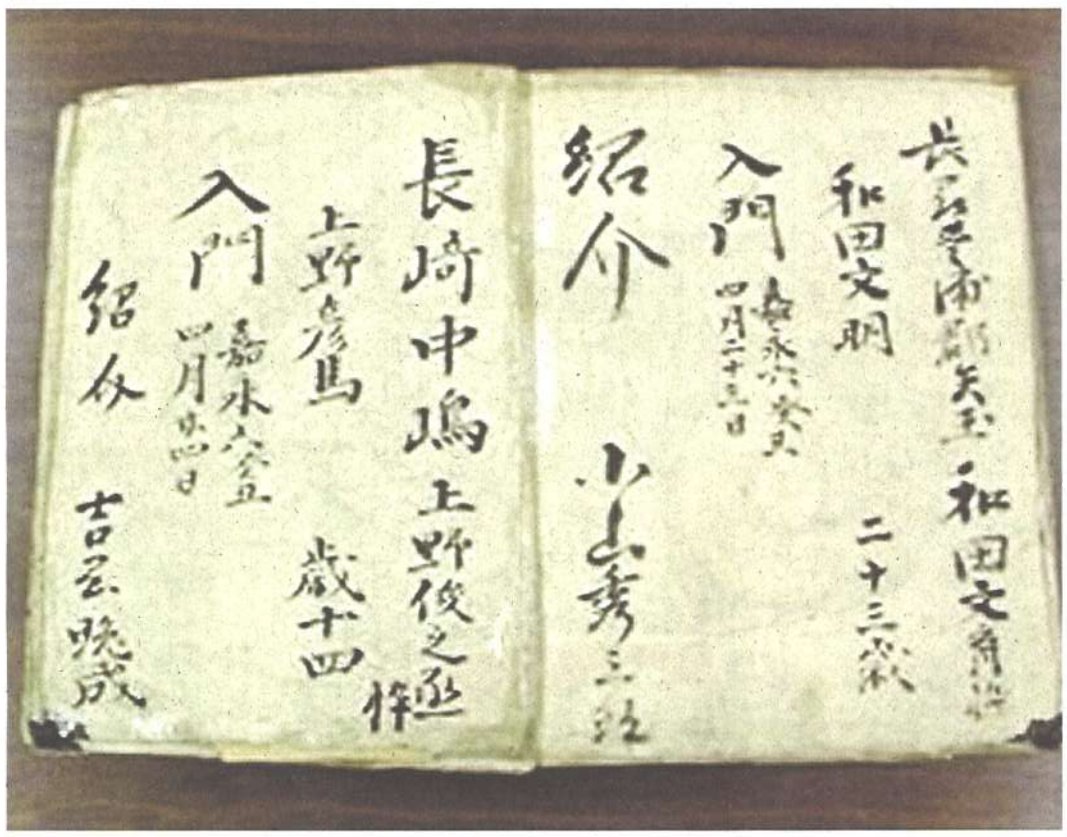
以曽は彦馬の教育について、夫の親友である画家で医者の八幡町の木下逸雲に相談した。逸雲は基本的な学問修業の必要を説き、彦馬を親元から離して、懇意にしていた日田の儒学者、廣瀬淡窓の「咸宜園（かんぎえん）」で学ぶことを勧めた。当時、全国に名を馳（は）せていた全寮制の私塾で、高野長英、大村益次郎らを輩出したことで知られる。

咸宜園の入門簿には嘉永6（1853）年4月24日付の彦馬自筆の記録が残る。当時15歳の彦馬が「14歳」と書いたのは、咸宜園の水準に自分の学力が満たないと卑下したものと思われる。

それから間もない翌5月、彦馬は「朱唐紙・筆紛失事件」でいじめを受け、長崎に立ち戻る。

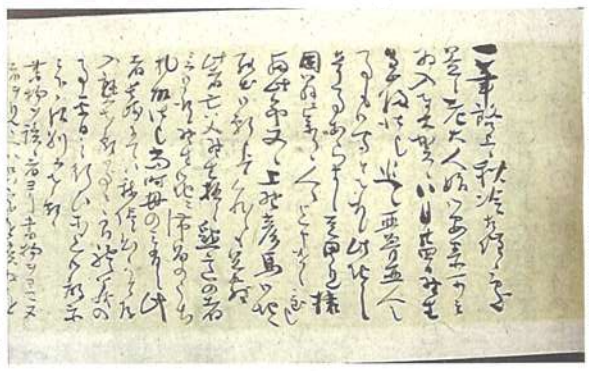
現在の廣瀬資料館（大分県日田市）に残されている塾長廣瀬青邨宛ての逸雲の手紙によれば、日田と長崎を往来する大蔵という僧に、彦馬宛ての返書に巻き込んで、朱唐紙10枚と真書筆4本、広形紙4帖を預けたが、誰かがくすねたのか彦馬には手紙だけしか届かなかった。

咸宜園でこれを仲介した年長の鍛冶屋が怪しいが、彦馬に聞いても要領を得ない。彦馬に鍛冶屋を問いただすように伝えるが、青邨先生も心添え願いたいという内容である。先輩の糾問への反撃は、幼い彦馬の心を痛めたようであり、7月1日、彦馬は結局長崎に帰ってしまった。



入門簿に、15歳の彦馬は「歳十四」と書き入れた
（公益財団法人廣瀬資料館蔵）

8月19日付の逸雲の手紙は、以曽が預けた授業料3両の受領を頼み、母子家庭の彦馬のわがままを直すため礼儀や作法を教え、長者を敬し読書の習慣をつけるように懇願し、病気の折の連絡先まで伝えている。9月14日付青邨宛ての手紙にも「此度又〻彦馬生罷出御願申上候」と、心を癒やした彦馬の再入塾を求め、重ねて母が預けた金子の受領（ぬし）を頼み、不足は日田来訪時に補填（ほてん）すると告げている。この再入学を機に、彦馬は咸宜園で本格的に修行に専念する。いじめは彦馬を一回り成長させたようである。


木下逸雲が廣瀬青邨に宛てた彦馬の推薦状（公益財団法人廣瀬資料館蔵）

教育

「咸く宜し（ことごとくよろし）」を塾名に掲げた咸宜園は、塾の門戸を武士以外の農工商僧医に開き、入門時に学力、年齢、地位を奪い（三奪法）、学徒を平等に無級とし、毎月25日に師の諮問で成績表（月旦評）を改める、実力主義の教育を実践していた。

四書五経の素読、輪読、聴講、輪講が課され、詩文の作成が求められた。公家や武家の儀式典礼や住居、調度、衣服などの生活用具（ぜいたく）、古法、作法を学ぶ「有職故実（ゆうそくこじつ）」や医学、兵学、天文学、地理学、数学に、和学や蘭学も教えられた。他郷での勉学の苦しさと友情の楽しさを詠んだ淡窓の「休道の詩」は有名である。

彦馬は再入塾してから11月には権二級上に進み、嘉永7（1854）年には三級から五級に上がり、さらに翌年11月には九級が最高であるところ六級下まで進むスピード昇級であった。このとき「李蹊」の雅号で創った彦馬の詩には、南画風の風景描写があふれている。

一時帰省を挟んで安政3（1856）年まで3年有余の咸宜園での修業は、彦馬という人間の基礎を培った。

咸宜園時代での親友は2歳年長の淡窓の孫、林外であった。林外は、のちに安政5（1858）年6、7月に長崎を訪問し、交遊録「林外日記」を残している。林外は、彦馬の家を訪問して以曽の月琴を聴き、彦馬と連れ立って南京寺（興福寺）、皓台寺、崇福寺、稲佐の製鉄所を見学し、料亭で飲食して韻賦詩を競い、大波止で生霊祭（精霊流し）を楽しんでいる。

このとき彦馬は家業の再興を目指し、オランダ語の学習を始め、海軍伝習所付帯の医学伝習所で、オランダ海軍の軍医、ポンペ・ファン・メールデルフォールトから舎密（化学）を学び始めていた。（長崎外国語大学長）

＝偶数月の第3日曜付サンデーぶんかに掲載＝

大分県日田市の史跡咸宜園跡。右が廣瀬淡窓の居宅「秋風庵」、左が書庫・書斎「遠思楼」の復原建物（咸宜園教育研究センター提供）

長崎新聞 2022（令和4）年6月19日掲載